

NEWS LETTER

No.56

2008 June

日本がん予防学会 Japanese Association for Cancer Prevention(JACP)

CONTENTS

- 01 タバコ対策の今後
(小笹晃太郎)
- 02 遺伝子多型研究における関連の強さの不一致性：その原因の1つは遺伝子環境交互作用
(浜島 信之)
- 02 ダイコンの辛味成分による膀胱がんの抑制効果
(西川 秋佳)
- 03 健康食品の安全性を考える—マスティックの発がん性評価—
(鰐淵 英機)
- 04 β -クリプトキサンチンとがん予防
(西野 輔翼)
- 05 アスピリンによる大腸がん予防臨床試験 (J-CAPP Study, J-FAPP Study II)
(石川 秀樹)
- 06 平成 20 年日本がん予防学会世話人会議要旨
- 07 平成 19 年事業報告・収支決算書・平成 20 年収支予算書
- 08 8th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society
- 08 がん予防大会 2009 愛知案内
- 08 編集後記

タバコ対策の今後



小笹晃太郎

京都府立医科大学 大学院医学研究科 地域保健医療疫学

喫煙のリスクについてはもはや議論の余地はなく、タバコ対策は、いかに喫煙者を減らすかということに的が絞られます。喫煙者に対する禁煙指導は、従来からの行動科学に立脚する保健指導に加えて、喫煙はニコチンへの薬物依存であるという観点から、離脱症状を緩和させるための薬物医療が一定の条件の下に保険診療となっています。ひとつは、ニコチン代替療法で、皮膚に貼るニコチンパッチと口内に貼るニコチンレジン(ガム)があります。本年からはさらに「選択的ニコチン性アセチルコリン受容体部分作用薬」である経口薬のパレニクリン(商品名チャンピックス)が加わるでしょう。近年さまざまな場所での禁煙化が進んでいますが、これは受動喫煙防止だけでなく、社会全体として喫煙者を減らす仕組みとして重要なことです。分煙とすると喫煙者を減らすインパクトは小さくなりますし、完全空間分煙とするための不要な経費がかかります。学校での喫煙防止教育はドラッグ対策の入り口ともなり重要です。「未成年者は吸ってはいけない」

と言うのは「大人になったら吸おう」と言うのと同義で、あこがれを助長するだけであり、「大人になっても吸ってはいけない」のです。つまりタスポは有害無益です。

タバコ対策の社会的枠組みの根幹として、国際保健機関(WHO)が提唱し、すでに日本を含めた152カ国が批准して発効している「タバコ規制枠組み条約(FCTC)」では、タバコ対策として、さまざまな社会的活動へのタバコ産業からの後援を排除するように求めています。また、世界医師会でも、医師がタバコ産業の資金を受け入れることは控えるべきであるとの見解を示しています。

タバコ対策は、社会全体から臨床医や教員、研究者までを含めた課題です。

〈関係のホームページ〉

タバコによる健康危害に関する宣言
<http://www.wma.net/e/policy/n4.htm>(世界医師会)
タバコ規制枠組み条約
<http://www.who.int/tobacco/framework/en/>(WHO)
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gako/treaty/treaty159_17.html(外務省)
WHO Tobacco Free Initiative (TFI)
<http://www.who.int/tobacco/en/>
厚生労働省タバコと健康HP
<http://www.mhlw.go.jp/topics/tobacco/main.html>
(財)健康・体づくり事業財団(健康ネット)
<http://www.health-net.or.jp/tobacco/front.html>
9学会合同研究班、禁煙治療ガイドライン(抄)
http://www.j-circ.or.jp/guideline/pdf/JCS2005_tujwara_d.pdf
禁煙治療院
<http://www.e-kinen.jp/what/index.html>(Novartis社)
<http://sugu-kinen.jp/>(Pfizer社)

遺伝子多型研究における関連の強さの不一致性： その原因の1つは遺伝子環境交互作用



浜島 信之

名古屋大学大学院医学系研究科 予防医学／医学推計・判断学

疫学研究では、疾病リスクや生体指標と生活習慣との間の関連の強さが異なることをよく経験する。この現象は、確率的な変動のほかに、研究実施上の問題（その集団からうまく対象者を選ぶことができなかつたことによる選択バイアスや、生活習慣に関する情報がうまく把握できなかつたことによる情報バイアス）と、対象が異なること（その生活習慣に反応する人の割合が集団により異なる）に起因する。

遺伝子多型の研究では、生活習慣の場合と異なり、正しく遺伝子型情報が把握されるし、集団から対象者を選択する場合に遺伝子型が影響を与えることが少ない。そのため結果の不一致は起きにくいように思われるが、実際には多くの遺伝子多型で結果の不一致が見られる。この現象は、確率的な変

動の影響を除けば、研究対象者における生活習慣などの背景の違いに起因する。

研究対象者は、性、年齢、感染状況、栄養状況、生活習慣など背景の異なる個体から構成され、遺伝子型が疾病リスクに影響を与え得る小集団の割合は研究により異なっている。その割合が大きければ強い関連が観察され、小さければ関連は検出されない（Hamajima N, et al. Minimal sizes of cases with a susceptible genotype and minimal odds ratios among susceptible individuals in case-control studies. Asian Pac J Cancer Prev 6: 165-169, 2005.）。

たばこの煙には数千の化学物質が含まれており、喫煙者では多数の遺伝子の発現が促進抑制を受けるので、遺伝

子型の影響が非喫煙者と異なる場合があることは容易に想像できる。また、栄養が不足している者では、その代謝経路にある酵素の影響を受けやすくなるため（例えば、葉酸摂取が不足している時の MTHFR の活性）、その酵素の遺伝子型の影響は強いことが予想される。このように曝露状況の違いにより遺伝子型の影響（例えば、相対危険度）が異なることを遺伝子環境交互作用と呼ぶ。

ゲノムワイドに遺伝子多型研究が行われ始め、関連する遺伝子多型が素早くスクリーニングできるようになった。スクリーニングされた遺伝子多型について、引き続き遺伝子環境交互作用の検討により、遺伝子型が影響を与える集団の特定が必要となる。

ダイコンの辛味成分による腭発がんの抑制効果



西川 秋佳

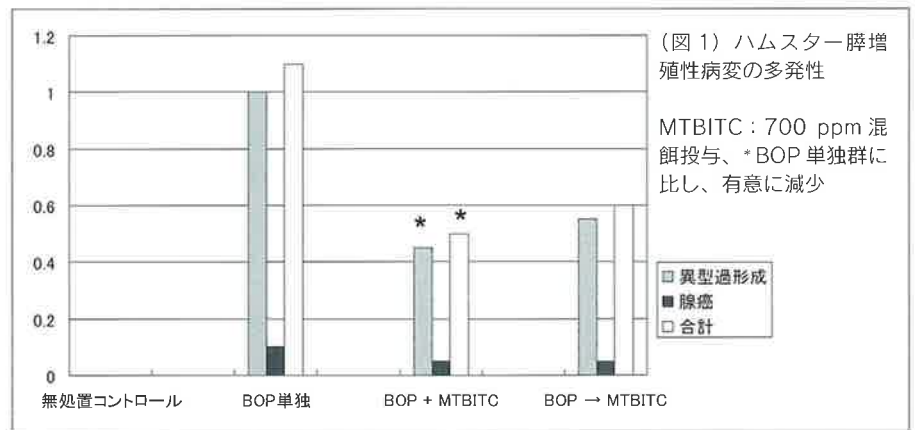
国立医薬品食品衛生研究所病理部

N-nitrosobis (2-oxopropyl) amine (BOP) 誘発ハムスター腭がんは、ヒト症例に類似した腭管由来の管状腺癌が誘発されることから、腭がん予防物質の検索モデルとして頻用されている。今回、大根の辛み成分でイソチオシアネート類の一種 4- (methylthio)-3-butenyl isothiocyanate (MTBITC)

のイニシエーション期またはポストイニシエーション期における修飾効果について検討した。雄シリアンハムスターに BOP を 1 週間に計 4 回皮下投与し、MTBITC 700 ppm を BOP 投与の 1 週前から 1 週間まであるいは BOP 投与 1 週間より実験終了までそれぞれ混餌投与し、16 週間後に腭臓

の腺癌を含む増殖性病変について検索した。その結果、MTBITC のイニシエーション期投与群において腭増殖性病変の発生頻度および多発性が BOP 単独投与群に比して有意に減少した。一方、ポストイニシエーション期投与群では抑制傾向はみられるものの、有意な影響は認められなかった。イソ

チオシアネート類はBOPなどのニトロソアミン類の代謝活性化を抑制し、解毒を促進することが知られており、MTBITCのイニシエーション期投与群での抑制効果は同様の機序によるものと推察される。大根はわが国特有の食材であり、新規のがん予防物質として世界に発信できる可能性がある。(京都府立大の中村考志博士との共同研究)



健康食品の安全性を考える —マスティックの発がん性評価—



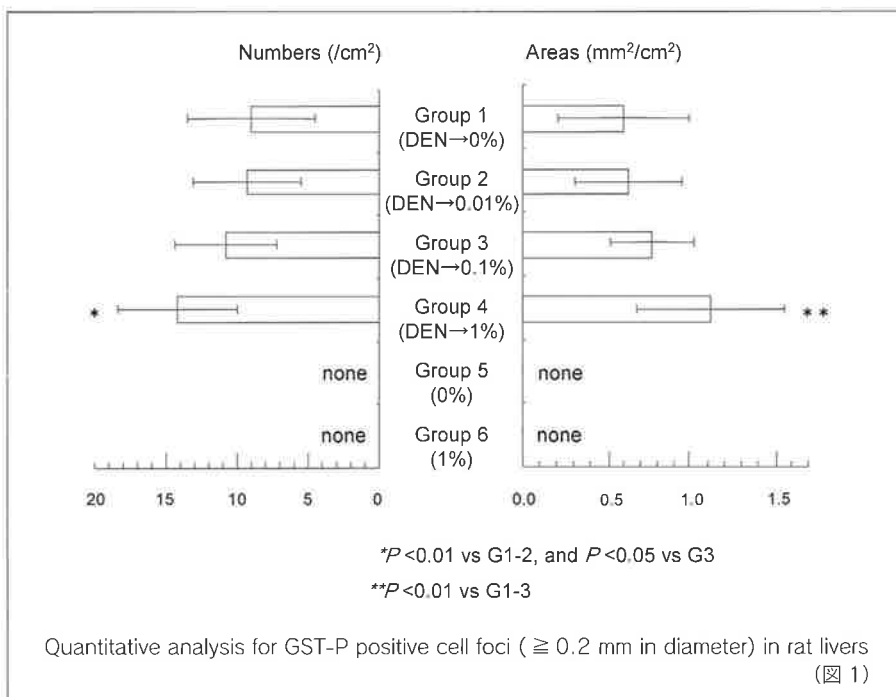
鯨淵 英機
都市環境病理学

大阪市立大学大学院医学研究科

Mastic (*Pistacia lentiscus* var. Chia) は地中海沿岸に自生する常緑灌木であり、ギリシャのヒオス島で特に栽培され、世界中に輸出されている。幹から採取される樹脂や葉の煮汁は、古代ギリシャ時代よりの民間療法として、肝黄疸や胃疾患の治療に用い

られている。また食品、化粧品、歯磨き粉、チューイングガムなどに添加され、さらに抗菌作用を利用した医薬品・材料に応用されている。特に最近、ヘリコバクター・ピロリ菌の増殖を抑制することが注目され、健康食品として販売されている。しかしながら、動

物を用いた毒性試験の報告は一つしかなく、発がん性試験の報告は皆無である。我々は、F344 ラットを用いて、8週間の伊東試験法を施行しマスティックの発がん性に焦点を当てた安全性評価を行った。被検物質はヒオス島産のマスティック樹脂をパウダー状に粉碎したもので、0、0.01、0.1、1%の濃度で基礎食に混餌投与した。肝重量はDEN 単独群に比べDEN + 0.01%群から有意に増加しており、DEN + 1%群まで用量相関性を認めたと、血液データでは肝機能障害は認められなかった。ラット肝前がん病変マーカーであるGST-P 陽性細胞巣(直径 $\geq 0.2\text{mm}$)の肝単位面積(1 cm^2)当たりの個数と面積は、共にDEN + 1%群にて有意に増大した(図1)。更に個々のGST-P 陽性細胞巣の平均面積も同群でのみ有意に高く、特に直径 $\geq 0.4\text{mm}$ の大型病変の個数が有意に増加した。また、GST-P 内部でのBrdU 標識率(%)がDEN + 1%群にて、DEN 単独群より約4.7倍にまで有意に増加した。肝凍結標本を用いたRT-PCR 解析の結果、1%マスティック群の肝ではCYP3A ファミリーを中



心に多くの Phase- I 酵素と、Phase- II 解毒酵素が誘導されていた。しかし、酸化 DNA 損傷のマーカである 8-OHdG 形成レベルに差は認めなかった。このように、マスティックはラッ

ト肝発がんに対してプロモーション作用を発揮し、GST-P 陽性細胞巢の内部での細胞増殖亢進作用が示され、その安全性に問題あることが明らかとなった。健康食品は効能ある成分を濃

縮し、高濃度に摂取されることがあるため、発がん性を含む安全性を確認することが必要と考えられる。

β-クリプトキサンチンとがん予防



西野 輔翼

立命館大学グローバルイノベーション研究機構・京都府立医科大学がん征圧センター

カンキツ類には多彩な機能性成分が含有されており、がん予防に活用できる可能性があるものも多い。たとえばリモノイドやテルペノイドに関する研究は古くから行われてきた。さらに、カロテノイドやフラボノイドに関する研究も進み、データが蓄積してきている。われわれの研究グループもカンキツ類の主要カロテノイドである β-クリプトキサンチンを中心に、がん予防への利用へ向けた研究に取り組んできた。β-クリプトキサンチンに注目した理由は、抗発がんプロモーターを探索するためのスクリーニングテストにおいて、種々のカロテノイドの中でトップクラスの効力を示すことを見出したというきっかけがあったばかりでなく、β-クリプトキサンチンはカンキツ類の中でもわれわれ日本人になじみのある温州ミカンに最も豊富に含有されていることが知られていたからである。

はじめに取り組んだのは、β-クリプトキサンチンの皮膚発がんプロモーション抑制効果を動物実験で検討することであったが、予想したとおり優れた抑制効果を示した。さらに、紫外線(UVB)で発がんイニシエーションをかけた後、TPAでプロモーションを行う二段階皮膚発がん実験モデルを用いて、経口投与したβ-クリプトキサンチンによって有意なイニシエーション抑制効果が得られることも証明され

た。興味深いことに、経口摂取したβ-クリプトキサンチンは皮膚に蓄積することがヒトにおいて確認されている。したがって、オゾンホール破壊で増加した紫外線による皮膚発がんが問題となっている地域(オーストラリア南部やアメリカ北部など)において臨床試験を行う価値は十分にあると考えられる。

β-クリプトキサンチンは皮膚のみならず大腸においても発がん抑制効果を示すことが動物実験によって証明されている。さらに疫学的研究によって肺がん¹⁾、膀胱がん²⁾、食道がん³⁾のリスクを低減させる可能性があることも示唆されており、特に注目すべきことは、カロテノイドのうちβ-クリプトキサンチンだけに特異的に発がんリスク低減効果を認めた報告が相次いでいる点である。

また、複合カロテノイド(リコピン、α-カロテン、β-カロテンなどの混合物)の肝がん予防効果をβ-クリプトキサンチン強化温州ミカンジュースの併用によって増強することも明らかとなった。

このようにβ-クリプトキサンチンはがん予防分野における有望な研究対象であり、今後の発展が期待される。

参考文献

- 1) Mannisto S et al.: Cancer Epidemiol. Biomarkers Prev. 13, 40-48, 2004.
- 2) Zeegers MP et al.: Br. J. Cancer 85, 977-983, 2001.
- 3) De Stefani E et al.: Nutr. Cancer 38, 23-29, 2000.

大学院生募集

京都府立医科大学分子標的癌予防医学では、平成21年度入学の大学院生を募集中。

[研究内容]

- 1) 発癌制御に最も重要である癌抑制遺伝子のp53やRBに関連した遺伝子群の発現調節剤による新規の癌の分子標的予防法・療法の企業との開発。
- 2) 同経路を用いた新規の癌の分子診断機器の開発。

[大学院募集対象]

博士課程(一部修士課程も可)

[募集人数]

2-3名だが定員になり次第×切。

[入学資格]

医学部卒か、理・工・薬・農学部系の大学院修士課程修了者(見込み含む)。出願前に一次募集は8月頃まで、二次募集は11月頃までに相対のこと。詳細は下記参照。

http://www.kpu-m.ac.jp/university/graduate/graduate_st.html

連絡先:

〒602-8566 京都市上京区河原町広小路
京都府立医科大学・大学院医学研究科・分子標的癌予防医学 酒井 敏行

Tel: 075-251-5339(教授室)、

075-251-5338(教室)、

Fax: 075-241-0792、

e-mail: tsakai@koto.kpu-m.ac.jp

電話相談歓迎

ホームページ

<http://www2.kpu-m.ac.jp/~pubmed/>

アスピリンによる大腸がん予防臨床試験 (J-CAPP Study、J-FAPP Study II)



石川 秀樹

京都府立医科大学 分子標的癌予防医学

厚労省第3次対がん総合戦略研究事業、がん化学予防剤の開発に関する基礎及び臨床研究（班長：若林敬二）にて、2つのアスピリンを用いた大腸癌予防のための多施設二重盲検無作為割付臨床試験が進行中である。これらの試験を簡単に紹介する。これらの試験では、1シート31錠のカレンダー型両面アルミPTP包装した試験薬を用いている。

1) 大腸腫瘍患者へのアスピリンによる発癌予防臨床試験 (J-CAPP Study)

徳留信寛先生（名古屋市立大学 健康増進・予防医学）を試験責任者として、全国の大腸内視鏡検査専門23施設に協力を得て、実施されている。

多施設二重盲検無作為割付臨床試験であり、大腸に大腸腫瘍（粘膜内癌・腺腫）を1個以上持ったことのある40歳以上、70歳以下の患者を対象に、低用量アスピリン（100mg/day）腸溶錠またはプラシーボ錠を1日1錠

2年間投与する。2年目の大腸内視鏡検査による大腸腫瘍発生状況、一部施設では直腸粘膜ACFやS状結腸粘膜mRNA（Cyc1n D1、PCNA、Baxなど）発現量を把握する。最終解析人数500人（1群250人）目標数としている。

2007年1月に呼び掛けを開始、2008年3月28日時点で351人に参加を呼び掛け283人（81%）が参加同意している。

2) 家族性大腸腺腫症患者へのアスピ

リンによる発癌予防臨床試験 (J-FAPP Study II)

石川が試験責任者を担当する家族性大腸腺腫症100人に対する多施設二重盲検無作為割付臨床試験である。アスピリン腸溶錠（100mg/day）1日1錠またはプラシーボ錠を、6～10カ月間投与する。主エンドポイントは、投与後6～12カ月後の大腸腫瘍の増大の有無である。2007年5月から呼び掛けを開始している。



試験で用いている
カレンダー型両面アルミPTP包装

第二回国際シンポジウム
「**コメと疾病予防**」
<http://www.rice-studies.org>

2008年
10月26日(日)・27日(月)
和歌山県民文化会館
ホテルアバローム紀の国

■ プログラム

プログラムは基調講演と招待講演およびポスター発表からなっています。

■ 基調講演

- ・民族学
- ・疫学
- ・食品科学
- ・イネに関する基礎研究
- ・日本人の食生活
- ・その他

■ 招待講演

- ・フェルラ酸
- ・タンパク質
- ・脂質と脂溶性成分
- ・IP6 とイノシトール
- ・デンプン、食物繊維、アントシアニンなど
- ・その他

■ シンポジウム事務局

〒641-8509
和歌山市紀三井寺811-1
和歌山県立医科大学内科学第一講座内
<http://www.rice-studies.org>

平成 20 年世話人会議事要旨

日本がん予防学会

1. 開催日時 平成 20 年 5 月 23 日(金)
12:45 ~ 13:30

2. 開催場所 九州大学医学部百年講堂
(福岡県福岡市)

3. 出席状況 出席 25 名、欠席 36 名

4. 議案の審議状況および議決の結果

(1) 平成 19 年事業報告、決算報告の承認

古野純典会長(九州大学大学院医学研究院教授)が開会を宣言。

議事に入り、まずは事業報告がなされた。次いで事務局より決算報告がなされ、渡辺民朗監事(岩手県立大学客員教授)から適正に処理されている旨の監査報告があり、原案通り了承された。

(2) 平成 20 年予算案

原案通り了承された。

(3) 平成 21 年暫定予算案

原案通り了承された。

(4) 第 17 回代表世話人の選任

次々期(第 17 回、平成 22 年)会長の選任について、浅香正博氏(北海道大学大学院医学研究科分子病態制御学講座教授)が推薦され、承諾された。

なお、次々年度の 2 研究会の会長につき、日本がん疫学研究会会長、ならびに日本がん分子疫学研究会会長に森満氏(札幌医科大学教授)が決まったことが古野会長より紹介された。

(5) ニュースレター編集委員の交代

編集委員の田中卓二氏より同委員退任の希望があり、後任に西川秋佳氏(国立医薬品食品病理部長)が推薦され、承認された。

(6) 世話人の追加について

世話人に石川秀樹氏より松浦成昭氏(大阪大学医学部教授)、前田 浩氏より葛西 宏氏(産業医科大学教授)、豊国伸哉氏(京都大学大学院医学研究科教授)の 3 氏が推薦され、承認された。

5. 報告・協議事項

(1) 第 16 回(平成 21 年)学会準備状況について

次年度会長白井智之氏(名古屋市立大学大学院医学研究科教授)より第 16 回学会が平成 21 年 6 月 16 日(火)~17 日(水)、愛知県がんセンター国際医学交流センター(愛知県名古屋市)にて日本がん分子疫学研究会、日本がん疫学研究会との合同にて「がん予防大会愛知」として開催すべく準備が進行中であるとの報告がなされた。

(2) その他

① 前々回の第 13 回から名称が学会に変更したことに伴い、世話人会の名称を評議員会に変更しなくてよいかとの意見があった。ただ現時点では形式よりも実質的な内容改善がより緊急であるとの意見もあり、将来の課題とすることにした。(渡辺民朗氏、小林 博氏)

② ここ数年の会員数の微減について、会員の増加に向けた努力が必要であろうとの指摘があった。現在の学生会員は 12 名。学生会員の増加に向けて学会の際のポスター発表の推進や年会費の減額など学生会員を増す方策を次年度までに検討したらよい。なお、今年度は 3 学会合同開催のため、どうしても会費の安い学会、研究会に入会者が偏ってしまう傾向があった。(若林敬二氏、前田 浩氏、古野純典氏)

③ アジア諸国との協調を強めていくことが、会を運営するうえで今後重要となってくると思う(若林敬二氏)。海外からの講演者も積極的に入れたほうが良いのではないかと。ただしその場合、全部の発表、抄録を英語にする必要が出てくると思われる(古野純典氏)。なお、アジア諸国との協調でいえば、本年 10 月 28~30 日、名古屋で開催される日本癌学会では 10 の International Session のうち 8 つはアジアベースの発表であるし、UICC でもアジアでのがん予防を取り上げていることが紹介された(田島和雄氏)。

④ 会員の増加について、日本ではまだ「予防」についての位置づけが弱いことも一因と思われる。AACR では Frontiers in Cancer Prevention Research として「予防」の視野を拡大解釈している。実学的に一般市民への働きかけも重要ではないか(小林博氏)。

⑤ 一般市民への働きかけとしては、日本生化学会などでは文部省の青少年育成プログラムによって高校生の発表を行っていることが紹介された(渡辺民朗氏)。予防学会としては難しい面もあるかと思うが、禁煙のテーマなどでは可能性があるかもしれない(早津彦哉氏)。次年度以降の検討課題とする。

以上をもって議案全部の審議を終了したので、13 時 30 分古野純典会長が開会を宣言し、終了した。

付記

昨年の世話会で新世話人の推薦について会長一任の決議をいただき、前会長の若林敬二氏より今井田克己先生(香川大学)、河田純男先生(山形大学)、中村正和先生(大阪府立健康科学センター)、山口直人先生(東京女子医科大学)、鰐淵英機先生(大阪市立大学)の 5 名の推薦があった。このことは会報(No.53、2007 年 9 月)にでも紹介された。ただし今年度世話会の席上での紹介がなされなかったため、次年度改めて承認方の手続きをすることにした。

賛助会員継続の御礼

平成 19 年度は下記 10 社から賛助会員に継続加入申し込みいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

- ・(株)アミノアップ化学
- ・エーザイ(株)
- ・江崎グリコ(株)
- ・(株)クレハ
- ・(株)玄米酵素
- ・第一三共(株)
- ・大鵬薬品工業(株)
- ・森永乳業(株)
- ・(株)ヤクルト本社中央研究所
- ・湧永製薬(株)

(50 音順)

平成 19 年事業報告

(平成 19 年 1 月 1 日～12 月 31 日)

1. 学術会議開催事業

会則第 4 条 1 項及び第 21 条に掲げる事業は次の通り行った。

①第 14 回日本がん予防学会

平成 19 年 7 月 12 日(木)、13 日(金)の両日、学術総合センター(東京)にて第 14 回学会(代表世話人・若林敬二 国立がんセンター研究所長)を開催、220 余名が参加した。

初日は「がんのハイリスクグループに対する有効な予防方法」をテーマに 5 名の研究者による合同シンポジウムと 10 名の研究者による一般講演、2 日目は「がん予防におけるがん検診の役割」をテーマに 4 名の研究者による合同シンポジウムと招待講演、5 名の研究者による一般講演、ポスター発表が行われ最新の研究成果が発表された。

②世話人会・総会

・平成 18 年決算、平成 19 年予算、平成 20 年暫定予算の承認
・平成 21 年(第 16 回)会長に白井智之氏(名古屋市立大学大学院医学研究科教授)を選任

2. 会報発行事業

会則第 4 条 4 項に掲げる事業は次の通り行った。

① NEWS LETTER No.51 (Mar.)

「職業がんの予防(小川康恭先生)」など 8 編を掲載(編集委員 津金昌一郎氏)

② NEWS LETTER No.52 (Jun.)

「食品成分によるがん予防(金沢和樹先生)」など 6 編を掲載(編集委員 中江 大氏)

③ NEWS LETTER No.53 (Sep.)

「がん予防大会 in TOKYO 2007 を開催して(若林敬二先生)」など 9 編を掲載(編集委員 浜島信之氏)

④ NEWS LETTER No.54 (Dec.)

「高齢化社会のがん予防(北川知行先生)」など 10 編を掲載(編集委員 細川真澄氏)

投稿歓迎

会員の皆様からの投稿を歓迎致します。化学予防に限らず免疫、栄養、素因、喫煙、病理などがんの予防に関わる広い分野の寄稿を歓迎致します。また、会員の皆様にお知らせ致したい学会等の案内がございましたら事務局(FAX:011-222-1526、E-mail:master@jacp.info)までお知らせいただければと存じます。

平成 19 年収支決算書

(平成 19 年 1 月 1 日から平成 19 年 12 月 31 日まで)

*収入の部

科目	予算額	決算額	備考
会費収入	2,115,000円	1,730,000円	5,000円×3名=15,000円、8,000円×165名=1,320,000円、10,000円×1名=10,000円、15,000円×1名=15,000円、16,000円×11名=176,000円、18,000円×1名=18,000円、24,000円×6名=144,000円、32,000円×1名=32,000円
賛助会費収入	1,000,000円	600,000円	6口×100,000円=600,000円
雑収入	1,000円	3,475円	決算利息 3,461円、預金利息 14円
当期収入合計	3,116,000円	2,333,475円	
前期繰越金	3,076,911円	3,076,911円	
合計	6,192,911円	5,410,386円	

*支出の部

科目	予算額	決算額	備考
会報製作費	430,000円	264,600円	NEWS LETTER No.51~54、ホームページ更新
印刷費	200,000円	81,450円	会員名簿・封筒印刷、郵便振込用紙印字
補助金	500,000円	500,000円	第14回日本がん予防学会補助金
通信費	350,000円	151,578円	会報送料98,030円、電話・FAX料33,113円、郵便・切手代20,435円
消耗品	50,000円	9,358円	一般事務用品9,358円
旅費・交通費	100,000円	98,440円	第14回学会出張旅費(東京)
事務局謝金	360,000円	360,000円	月額30,000円(1名分)
事務所維持費	440,000円	440,000円	事務所借上げ分(光熱・冷暖房費、水道料、清掃費)
賃借費	107,500円	107,415円	パソコンリース料56,700円、ホームページ用サーバー使用料50,715円
雑費	70,000円	51,890円	振込手数料19,890円、図書券・図書カード(執筆謝礼)32,000円
予備費	3,585,411円	0円	
合計	6,192,911円	2,064,731円	

*次期繰越金(収入5,410,386円-支出2,064,731円)=3,345,655円

平成 20 年収支予算書

(平成 20 年 1 月 1 日から平成 20 年 12 月 31 日まで)

*収入の部

科目	予算額	前年度予算額	備考
会費収入	2,035,000円	2,115,000円	@8,000円×245名、@5,000円×15名
賛助会費収入	1,400,000円	1,000,000円	@100,000円×10口(H20)、@100,000円×6口(H19)
雑収入	7,000円	1,000円	預金利息
当期収入合計	3,442,000円	3,116,000円	
前期繰越金	3,345,655円	3,076,911円	
合計	6,787,655円	6,192,911円	

*支出の部

科目	予算額	前年度予算額	備考
会報製作費	430,000円	430,000円	NEWS LETTER No.55~58、ホームページ更新
印刷費	200,000円	200,000円	封筒、便箋の印刷、会員名簿印刷
補助金	500,000円	500,000円	第15回日本がん予防学会補助金(福岡)
通信費	350,000円	350,000円	会報送料200,000円、電話料70,000円、郵便料80,000円
消耗品	50,000円	50,000円	一般事務用品30,000円、コピー用紙20,000円
旅費・交通費	100,000円	100,000円	事務局職員の出張(第15回日本がん予防学会)1名、福岡
事務局謝金	360,000円	360,000円	月額30,000円(1名分)
賃借費	547,500円	547,500円	事務所借上げ分(光熱・冷暖房費、水道料、清掃費)400,000円、パソコンリース料56,700円、サーバー使用料50,800円
雑費	70,000円	70,000円	振込手数料35,000円、図書カード(執筆謝礼)35,000円
予備費	4,180,155円	3,585,411円	
合計	6,787,655円	6,192,911円	

8th International Conference of the Asian Clinical Oncology Society

Organizers

ACOS Officers

Honorary President: PROF. TETSUO TAGUCHI (Japan)
 President: PROF. YAN SUN (China)
 Vice-President: PROF. ANTONIO B. VILLALON, MD (Philippines)

Organizing Committee

Over-all Chair: George Eufemio, MD
 Secretary General: Corazon Ngelangel, MD
 Chairs and Alesas Committee
 Chairs: Gerardo Cornelio, MD, Jhede Peneyra, MD
 Abstracts and Paper Review Committee
 Chairs: Henrick M. Istrebel, MD, Elizabeth Istrebel, MD
 On-site Registration and Publication Committee
 Chairs: Kelly Salvador, MD, Pauline So-Kaw, MD
 Publicity and Promotions Committee
 Chairs: Honey Abarquez, MD, Noel Pinggoy, MD
 Scientific Committee
 Chairs: Gloria Cristal-Luna, MD, Edward Wang, MD
 Physical Arrangement Committee
 Chairs: Gracieux Fernando, MD, Ma, Cheryl Lyn Sanson-Fernando, MD
 Socials, Shuttle Service and Security Committee
 Chair: Luzmindo Fajardo
 Finance Committee
 Chairs: Don M. Ferry, Jr., PhD, Tomas V. Apacible
 Local Advisers (Philippines)
 Francisco Dizon, MD, Ernesto Domingo, MD, Antonio Ma. Guerrero, PhD, Conrado LL. Lorenzo, MD, Roberto Paterno, MD, Alberto Roxas, MD.

Call for Abstracts

Submission of Abstracts

1. Start of Submission: November 01, 2007
2. Abstracts must be written in English.
3. Abstract must be submitted via email as text within the body of the email or as attached Microsoft Word document to ace_strategists@yahoo.com.ph
4. Please submit the following:
 - a) Title of the Study
 - b) Author(s) and Institutional Affiliation(s). Please underline the name of the presenting author
 - c) Text of the Abstract: The Abstract should contain the Introduction, Methodology, Results and Conclusion.
 - d) Maximum Number of Words: 250 words or less.
 - e) Deadline of Submission: Abstracts must be received by June 30, 2008.

Programme

1. Scientific Programme
 - American Society of Clinical Oncology (ASCO)-in-Asian Clinical Oncology Society (ACOS) Philippine Society of Medical Oncology (PSMO) Sessions
 - ASCO Advanced Cancer Course: Cancer Care in the Older Population
 - 1. The Business of Aging
 - 2. Surgery, Radiotherapy and Cancer Prevention of the Older Cancer Patient
 - 3. Drug Treatment of the Older Patient with Cancer
 - 4. Treatment of the Older Patient with Specific Type of Cancer
2. European Society for Medical Oncology (ESMO) and Molecular Oncology Society of the Philippines (MOSP) Joint Symposium-in-ACOS
 - 1. Gynecological Cancer
 - 2. Targeted Molecular Oncology: The Science Behind the Disease and Treatment

Plenary Sessions

1. Philippine Cancer Society, Inc. (PCSI) & World Health Organization (WHO)-in-ACOS "Cancer Prevention Milestones and its Continuing Program Globally"
2. Philippines Cancer Society & Philippine Society of Oncology (PSO)-in-ACOS "Oncology Medical Tourism"

Educational Sessions

1. Neuro-Adult Pediatric Oncology
2. Gene Expression Profiling
3. Soft Tissue and Bone Sarcomas
4. Diagnostic Oncology
5. Colorectal Cancer
6. Head and Neck Cancer
7. Urologic Cancer
8. Mechanisms of Multi-Drug Resistance
9. Leukemia-Lymphoma
10. Radiotherapy Updates

Special Sessions

1. Andres Soriano Memorial Lectures: Integrative Oncology
2. Department of Health-Philippine Cancer Society-Andres Soriano Foundation-Cancer Care Control Network Lay Forum
3. Philippine Oncology Nursing Association (PONA)-in-ACOS: Oncology Nursing

Consult-the-Experts Sessions

1. Breast Cancer - Management of Early Stage
2. Liver Cancer
3. Lung Cancer

Scientific Symposia

1. Liver Cancer
2. Multidisciplinary Updates on Metastatic Liver Cancer Diseases, Head and Neck Cancer, and Lung Cancer

Oral Presentations

1. Gynecological Cancer
2. Diagnostic Imaging
3. Breast Cancer
4. Pathology
5. Basic Sciences
6. Lung Cancer
7. Neuro/STS Bone
8. Head & Neck Cancer
9. Urology
10. Colorectal Cancer
11. Leukemia-Lymphoma
12. Radiotherapy
13. Gastrointestinal/Liver
14. Supportive Treatment
15. Cancer Prevention

II. Industry Sponsored Symposium

1. Kalbe: Lung Cancer
2. Sanofi-Aventis: Breast or Head and Neck Cancer
3. Dabur: Breast Cancer
4. AstraZeneca: Breast and Lung Cancer
5. Bayer: Hepatocellular Cancer
6. Pfizer: Renal Cell Cancer
7. Eli Lilly: Non-Small Cell Lung Cancer
8. Novartis: Chronic Myelogenous Leukemia
9. Roche: NSCLC, Breast Cancer and Colorectal Cancer
10. GlaxoSmithKline: ERB2 Positive Breast Cancer
11. Omnibus Biomedical: Fluorescent In-Situ Hybridization (FISH) Technology in Cancer Management

III. Social Programme

1. Opening Ceremonies Day 1, September 21, 2008
2. Speakers Night Day 2, September 22, 2008
3. Fellowship Night Day 3, September 23, 2008
4. Closing Ceremonies Day 4, September 24, 2008
5. City Tour Day 4, September 24, 2008

〔編集後記〕

今回、喫煙の問題に始まり、疫学、実験医学、介入研究に至るまで、第一線の先生方に執筆していただくことができたのは、大きな喜びである。どの分野の研究も、最終目的は同じで、癌死を減らそうという一念で研究が行われていることは明白である。執筆いただいた先生方は、全ての領域の重要性を認識されている方々ばかりであるが、時々、分野が異なると、他分野に対する理解が欠如してくる場合もある。

その意味において、先日、日本がん予

防学会と、日本がん疫学研究会、日本がん分子疫学研究会が合同で、がん予防大会 2008 福岡として、博多で行われたことは有意義であった。私も参加させていただき、種々の分野の発表を聴かせていただいたことは、大きな収穫であった。会議でも話題になっていたように、今までの豊富な基礎研究の成果を元に、実際のがん予防の実践研究を行っていくことの重要性も再認識させていただいた。

このような応用研究は、論文を書く目的の研究とは異なる多くの苦勞も避けられない。そのような事情を押して

でも、これを強力に推進することが、住民への還元でもあり、またそれが私達の大きな責務であることを改めて感じた。来年以降も、この合同のがん予防大会が益々発展することと、それにより、がん予防の実践研究が進展することを強く願っている。(酒井 敏行)

発行

Japanese Association for Cancer Prevention
 日本がん予防学会

会長

古野 純典
 (九州大学大学院医学研究院予防医学分野教授)

編集委員(※本号担当者)

大澤 俊彦	西川 秋佳
※酒井 敏行	浜島 信之
中江 大	細川真澄男
	(50音順)

事務局

札幌市中央区大通西6 北海道医師会館内
 TEL:011-241-4550 FAX:011-222-1526
 E-mail:master@jacp.info
 URL:http://jacp.info/

問い合わせ、入会のご希望などは事務局へ
 (担当:小林・及川)

がん予防大会 2009 愛知

- 第 16 回 日本がん予防学会 (会長:白井 智之)
- 第 10 回 日本がん分子疫学研究会 (会長:菊地 正悟)
- 第 32 回 日本がん疫学研究会 (会長:田島 和雄)

- 会 期:平成 21 年 6 月 16 日(火) ~ 17 日(水)
- 会 場:愛知県がんセンター 国際医学交流センター
 (愛知県名古屋市中区千種区鹿子殿 1-1)
- 主 課 題:予防の容易ながん困難ながん